

大腸内視鏡検査の合併症リスク、高齢者で高く

高齢者での大腸内視鏡検査後の合併症リスクについては十分なデータがない。そこで本研究では、地域住民を対象とした後ろ向きコホート研究を実施し、75歳以上の高齢者の大腸内視鏡検査後30日以内の合併症の発生率およびその危険因子について検討した。

カナダのオンタリオ州のデータベースから、2008年4月から2017年9月に外来で大腸内視鏡検査を受けた50歳以上の成人38,069例を対象とした。炎症性腸疾患患者と遺伝性大腸がん症候群の患者は除外し、検診対象者群(50~74歳)と高齢者群(75歳以上)に分けた。被検者の平均年齢は65.2歳であり、女性が50.0%、初めて大腸内視鏡検査を受けた人は73.1%であった。解析の結果、検査後30日以内の合併症の累積発生率は検診対象者群で2.6%、高齢者群では6.8%と有意に高かった($P<0.001$)。検査後の合併症の独立した危険因子は、75歳以上(オッズ比2.3)、貧血(同1.4)、不整脈(同1.7)、うっ血性心不全(同3.4)、高血圧(同1.2)、慢性腎臓病(同1.8)、肝臓病(同4.7)、喫煙歴(同3.2)、肥満(同2.3)だった。一方、過去に大腸内視鏡検査を受けた回数が多い人ほど合併症リスクが有意に低かった(同0.9)。また、大腸がん内視鏡検査後30日後の時点で手術を受けていた割合は、検診対象者群と比べ高齢者群で有意に高かった(0.5% 対 1.6%、 $P<0.001$)。

したがって、大腸内視鏡検査後30日以内の合併症リスクは、50~74歳の人に比べ75歳以上の高齢者で高くなることが示された。75歳以上の高齢者、とくに併存疾患がある人については、大腸内視鏡検査を行うかどうかを慎重に判断する必要があることが示唆された。

出典 : Journal of American Medical Association. Network Open. 2020 Jun 1; 3(6): e208958.